



つながりが命を守る力になる ～福米中学校区防災体験キャンプの歩～



鳥取県米子市福米中学校区防災体験キャンプ実行委員会
実行委員長 防災士 松本 みゆき

1 変化する街の中で みえてきた課題

私たちが暮らす鳥取県米子市の人口は、2025年12月1日現在14万3,029人です。その中でも福米中学校は市内で最も生徒数が多く、新しい住宅やマンションの建設が進む地域です。一方で人の入れ替わりが進み、「隣に誰が住んでいるのかわからない」と感じるなど、人と人とのつながりの希薄さが課題となってきました。こうした地域だからこそ、災害時に支え合うため、日頃から顔の見える関係を築く取り組みが求められていました。

2 阪神・淡路大震災の日に 誓った「自らを守る力」

阪神・淡路大震災から23年を迎えた2018年1月17日、発災日と同じ日に、福米中学校区の有志が集い「防災体験キャンプ準備検討会」を開催しました。災害は、いつ、どこで起こるかわかりません。だからこそ、どこに暮らしていても、いざという時に「自分の命は自分で守る行動」がとれる人に育ってほしい——そんな思いから、小学生とその保護者を対象にした体験型の防災キャンプが始まりました。

2018年9月に第1回「福米中学校区防災体験キャンプ」を実施しました。私も小学5年生の娘と親子で参加し、避難所となる体育館で一夜を過ごしながら防災を学びました。この体験は、家庭で災害について話し合うきっかけとなり、子どもの成長を实

感する機会にもなりました。その後、実行委員として関わるようになり、第2回ではボランティアとして活躍する中学生を見た娘が「私もあになりたい」と話していました。

3 「できる人が、できる範囲で」 広がる地域の輪

新型コロナウイルス感染症の影響でキャンプは一時休止となりましたが、地域の想いは途切れることなく、2023年に再開しました。再開にあたっては、親子で参加することの大切さや良さを伝えていきたいと考え、実行委員長を務めることになりました。2025年9月には第5回目を無事に開催しています。キャンプは福米東小学校と福米西小学校の体育館を隔年で主会場とし、延べ50人を超える実行委員と地域企業・団体の協力で運営されています。実行委員は20代から80代まで幅広く、防災士、現役及び元PTA関係者、自治会役員、教員、行政職員などが、「できることを、できる人が、できる範囲で」関わる中で、新たなつながりが生まれ、地域の輪が少しずつ広がっています。

4 体験が気づきを変え、 行動を変える

キャンプ当日は、午後からプログラムが始まります。防災クイズなどの座学に加え、段ボール椅子づくり、非常用持ち出し袋を当てるゲーム、煙体験など、親子で学び、考え、体を動かすプログラムを行います。夕食は防災食を食べ、体育館の床で

シュラフにくるまって眠り、翌朝はカートンドッグを作って食べてお昼前に解散します。体験内容は、毎年少しずつ変化させています。今年はセラピードックについても学びました。限られた体験ではありますが、実際に体験することで得られる気づきは大きなものです。そして、参加者からは「また参加したい」「多くの人に教えた」と高評価を得ています。

5 「自助」から「共助」の担い手へ

親子で防災というテーマに向き合い、楽しみながら学ぶ姿はとても頼もしく感じられます。小学5年生で参加した娘は、今では高校生となり、ボランティアとして参加し続けています。こうした子どもたちの存在こそが、将来の避難所運営を支える力になると感じています。避難所では、避難者自身が運営に関わることが求められます。大人だけでなく、子どもも役割を担うこと

で、より円滑な運営につながるのです。

親子で学ぶ防災体験キャンプを通じて、「自助」の意識を育みながら、いざという時には地域で支え合う「共助」の担い手を増やしていくと考えます。この取り組みを評価いただき、このたび「令和7年防災功労者防災担当大臣表彰」を受けました。この受賞を励みに、今後も地域に根ざした防災の学びを広げていきたいと考えています。



カードゲームの様子



段ボール椅子を作成しているところ



夜の様子



集合写真